



## 人々つなぐ癒やしの音色

音は、時に言葉以上のメッセージ性を帯びる。ポーランド出身の作曲家フリデリク・シヨパン（1810〜49年）は、ピアノの音だけで祖国の風景、自らの人生を表現した。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で公演の機会を失ったオーケストラが、動画投稿サイト「ユーチューブ」で音楽のメッセージ発信を試みる。最初は舞台での無観客演奏だった。今は密接を避け、個々が自宅で楽器を奏でて撮影、画面上で重なるテレワーク形式が広がる。合奏しているかのような一体感を演出する。

「新日本フィルハーモニー交響楽団」の有志は3月下旬、金管楽器の少人数から始め、60人以上の「協演」へと発展させた。トロンボーン担当の山口尚人さんが個々の音の特徴を丹念に聴き込み、微妙に調整して編集、激励の演奏を家庭に届ける。

神戸が拠点の弦楽オーケストラ「スーパーストリングスコーベ」で

は国内外のメンバーが団結。自宅や寮から自撮りの画像を送信し、一つの作品に仕上げた。

音楽研さんのためヨーロッパに残る演奏家は、都市や国境封鎖が続き、鳴り響く救急車のサイレンに不安を深めていた。そこへ、動画参加を呼び掛けた。オーストリア在住の女性は3回撮り直した。ファンのための映像は、仲間をも励ます。「救われた」との言葉を聞いたプロデューサーの池田明子さんは涙した。

西宮市の兵庫県立芸術文化センターは市民の投稿画面を重ねる。芸術監督の佐渡裕さんの指揮で、センター管弦楽団が宝塚歌劇団のテーマ「すみれの花咲く頃」を演奏。そこへ市民の歌声、演奏、子どもたちの踊りが共鳴する。

人との接触、自由な往来が制限される中、音楽が国境、街を自由に飛び越える。癒やしの音色は人々の心に響き、絆を結んでいる。